

本の選び方と読み方

関口昌秀

1. あるテーマについて書かれた文

ここで「本の選び方と読み方」というタイトルで想定している「本」は、説明文とか論説文と呼ばれる文章で書かれたものである。

君たちが経営学部へ入学してから、授業の中で読んだり、授業のために読まなければならない本のほとんどは、詩や小説など文学の文章でなく、何事かについて論じた文となるだろう。「俳句」のような文学の授業を例外とすれば、詩や小説を読む必要に迫られることはまずない。俳句でも俳句論という、俳句について論じた論説文がある。たとえば、神奈川大学評論ブックレットの1冊『俳句から見た俳諧—子規にとって芭蕉とは何か—』（復本一郎著）などである。

君たちがあるテーマについて調べレポートにまとめるとき、読む本のほとんどは、そのような説明文や論説文である。あるテーマを論じた文が「論文」といわれるとき、本文に「注」の付けた体裁をとることがある。これが、洋の東西を問わず、最も学術的に手堅い形とされている。注は、本を読み通すには煩雑で邪魔だが、その第一の役割はそこに記した議論の証拠や根拠、出典を示すことにある。どんな論文にも、そのテーマに関連する先行研究というものがある。注の役割の第一は、それを示すことである。

しかし、どんなときでも、注を付けるわけではない。注は読む側にとっては邪魔ものだから、一般読者向けの文章ではふつう付けない。先にあげたブックレットは、ブックレット（「小さい本」という意味）という性格から、注は付いていない。しかし、注には大きな効用がある。そのテーマについてもっと勉強しようとするとき、さらに何を読んでいけばいいか、教えてくれる。また、その議論がどこまで真実で信用できるか判断するためには、注の文献に当たってみるとよい。引用文献を読んでみると、その議論がどうしてそうなるのか、そのテーマについての理解が深まっていく。たまには逆に、著者による引用文献の理解がおかしいことに気づくこともある。その場合は、著者の議論は信用できないと判断できる。このように、注には、著者の議論の信用性を高めたり（ある場合には低めたり）する効用がある。

2. 教員に尋ね、インターネットで検索、そして本の注から

ところで、君たちが文献をさがす必要が生じるのは、どんな場合だろうか。授業の中ではふつう、その授業の参考文献が指示されるだろう。だから、文献をさがす必要が生じるのは、あるテーマについて調べたいとき、あるいは調べてレポートをまとめなければならないときだろう。

その場合どうするか。まずすべきは、その授業の先生、あるいは関連科目の先生に尋ねてみることである。せっかく大学にいるのだから、これが一番の便利である。そして次に、インターネットで検索してみる。世間的には、今日これが一番の便利物だろう。ただし、そこで見つけたことをそのまますぐ真実だと信用してはならない。つねに、「ウラを取る」ようにしないといけない。たとえば、インターネットの中のフリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』の説明は役立つが、一つの参考に止めておかなければならない。それは第一歩で、そこから文献探しははじまる。そこに出ている参考文献に当たる。参考文献が示されていないければ、たとえば、神奈川大学図書館の蔵書目録で項目検索をかけて探してみる。インターネットの書店「アマゾン」で探すことも役立つかもしれない。

項目検索して多くの文献が出てきた場合、ではどの本から読むべきか。先生に聞けば、それも指示してくれることが多い。一般的に言って、初心者が第一に読むべきものは、一般向けに書かれた入門書である。複数ある場合は、出版年度が最新のものにする。それを手に取ってちょっと見る。役立ちそうなら、それを読む。「ちょっとちがう」と感じたら、別の本にする。この辺りはフィーリング、「感覚」である。年季を積めば確かな判断ができるようになるが、新人でもその「感覚」を大事にしていくのがよいと思う。

そのテーマを深めていくために、次に読む本は、読んだ文献の注の中から探す。注をひとわり見渡せば、そのテーマの広がりが見えてくる。その中で読むべきは、注の中の文献で、最も重要と感じたものである。ここでも自分の「感覚」が重要である。読んだ文献は面白かったが、参考文献が出ていない場合はどうするか。たとえば、先のブックレットのような場合である。そのときは、同じ著者の別の俳諧論を見してみる。もし、同じテーマに関連して著者が他に何も書いてない場合は、次に重要だと感じた文献に当たる。どちらにしても、重要だと感じた論者の議論は「労力の許すかぎり」見ておかねばならない。

このようにして知識が増え、そのテーマに関する考え方も深まっていく。その中で、同じ1つのテーマに関して、いくつかの考え方があることがわかってくるのがふつうである。君たちがテーマに選ぶ事柄に関しては、しばしば鋭く対立する立場がある。だから、たとえば、インターネットで政府広報から情報を得た場合、それに批判的な立場の見解も確認しておく必要がある。

本の場合でも、そこに書かれている内容を信用していいのか、という問題はある。だが、一般的には、インターネットよりは信用できるとみてよい。責任を負う個人がはっきりしているからである。ただし、政治的対立がそのテーマに影響する場合、批判する側の主張を確認してからレポート

をまとめる癖を付けておかなければならない。

3. 高校レベルの社会科の知識の必要性

ただし、あまりにもそのテーマに関する知識に乏しい場合、次のようなこともあるから気をつけなければならない。

これは昔の私の話だが、私は理科系に入学し、学部3年から文科系（教育学部）に変更した。高校時代、世界史が嫌いで、西洋史の知識がまったくなかった。とくに中世から近代への流れをわかっていなかった。教育学だけでなく、政治学・経済学など文科系の学問にとっては、近代化の道筋を押さえておくことが必要不可欠である。そこで、当時出版されていた、ある1冊の西洋史入門を読んだ。ところが、それから得た中世から近代への展開の理解はおかしいと、大学院の入学試験で西洋教育史の教官から指摘された。私が読んだ本は、西洋史の通説的理解を批判する立場の学者が書いたものだった。面接官は、君は通説を批判する立場なのですかと質問したわけなのだが、当時の私は通説を知らなかったわけで、その質問の意図も理解できないという無知を露呈したわけである。

一般に、学問には通説というものがある。とりわけ、高校までの教科の内容は、通説にもとづいて書かれている。私が読んだ本は、大学生向けのテキストとしてつくられた西洋史入門だった。大学のテキストであるから、高校の世界史を前提として、それに対する批判を展開していたわけである。だから、高校の世界史を理解していない私が読んでも、著者の意図を正しく理解できるはずもなかったのである。そこが間違いの元だった。西洋史の通説を知るためには、むしろ世界史の受験参考書でも読む方がよかったのである。

私は経営学について門外漢だが、それを学ぶにも、近代化の道筋理解は必要だと思う。日本の近代史理解もちろん必要だが、わが国の歴史的展開は近代化の道筋の1つとして理解する必要がある。近代化のモデルは西洋近代史の中にある。だから、東洋史や日本史でなく、まず「西洋近代史の大きな流れ」を押さえるべきである。必要なのは、あくまでも「大きな流れ」であって、受験に必要な細かな年代の暗記ではない。歴史観というものに近いが、「基本の流れ」は押さえていないといけない。

それには、大学受験用の世界史の「薄い」参考書が役立つのではないだろうか。「薄い」というのがポイントだ。それは、よくまとめてあるということである。（部厚い参考書は細かな事実を調べるときに辞書として役立つ。）しかも、必要なのは、西洋史における中世から近代への展開と、近代から現代への展開である。東洋史は当面いらない。少なくとも、西洋における近代の展開の道筋を押さえておかなければ、東洋における近代化も理解できるはずがない。たとえば、わが国を含めて、東洋は植民地化された側、植民地化の危機をどう乗り越えるかを課題とした。だから、植民地化を展開した西洋諸国のあり方をまず理解する。その上で、日本の近代化も理解できることになる。

西洋史を勉強した後に、日本史を勉強しましょうと言うつもりはない。ただ、一番手近に手に入る本が受験参考書で、それが「世界史」と「日本史」に区分されているので、その順に見ていくのがよいというまでである。ただし、あくまでも「基本の流れ」である。そこに書かれていること全てではない。余計な所は飛ばして、政治史と経済史の「流れの大枠」をつかむ。その後で、「現代社会」と「政治経済」の参考書（これも短くまとめたもの）で、現在の社会問題まで含めて、政治と経済を中心に社会の動きを押さえておく。

それ以外のこと、たとえばアジアの歴史は、その地域を勉強するときにやる。理想的には、高校の社会科に含まれている「地理」や「倫理」まで含めて、「日本史・世界史・地理・現代社会・政治経済・倫理」のすべてを知っておくべきである。しかし、現実には必修科目でないから、時間との関係で、そういう手順でやっていくのが合理的である。これは、あくまでも私の考えである。担当の先生ごとに考えを異にするだろうから、先生に確かめておくべきである。

高校社会科の内容の「基本」は大学での勉強に必要である。ただ、何が「基本」かは、わかっている人間には自明だが、「基本」を知らない人に余計な所を飛ばせと言うのは、無理な注文の感もある。そこで、大学の受験参考書でないが、次のような本も参考になるかもしれない。『読むだけですっきりわかる日本史』（後藤武士著、宝島社文庫）。これは、中学校の社会科で教育実習に行った学生の推薦する本である。彼はこれで苦手な日本史を克服したという。この著者は、政治経済や日本地理についても、同様の本を出しているようで、参考になるかもしれない。

4. 意味は文脈で決まる

1つの言葉には1つの意味が対応して決まっている。「犬」と言われて「馬」を思い浮かべる人はいない。しかし、1つの言葉が2つ以上の意味をもっている場合もある。

たとえば、英語の辞書（『リーダーズ英和辞典』）で「a」を引くと、「《漠然と》（ある）1つの～、ある1人の～《oneの弱まった意でふつう訳さない》」という意味と、「《総称的に》～というもの、すべて～《anyの弱い意でしばしば訳さない》」という意味が出ている。そして前者の例として、

There is a book on the desk. 机の上に本が（1冊）ある。

後者の例として、

A dog is an animal. 犬は動物である。

が掲げられている。「a」の意味は、この他にも「～家の人」とか、「～につき…」とか、この辞書では都合、8項目に分類されている。

ここで勘のいい君たちは、今あげた例は、日本語に存在しない冠詞だから、日本語での説明が分類されたのであって、取り上げた例が不適切じゃないか、と苦情を言うかもしれない。

では、「dog」を引いてみよう。そこには、「犬」という意味以外に、「密告者」「つかみ道具、鉄

鉤(てつかぎ)」など、全部で10項目の意味区分がある。「dog」の意味も1つではないのだ。日本語でも同じで、たとえば『広辞苑』で「犬」の項目を見ると、4項目に区分されている。面白いことに、日本語でも「警察の犬」とか言うように、「犬」には「密告者、スパイ」という意味がある。おそらくそれは、私たち人間の飼い主に対して犬がしめす性格から生じた派生的意味なのだろう。

このように言葉の意味はしばしば転用され、中核的意味から周辺の意味まで、ある広がりをもっている。では、実際に使われたときその言葉の意味はどれになるのか。それを決めるのは、その言葉が使われた文脈とってよいだろう。同じ「a」が、There is a book on the desk.では「ある1冊の(本)」となり、A dog is an animal.では「(犬) というもの」となるのは、「a」が置かれた文の性格、文脈による。文は1つの場の状況の中で発せられる。その状況が文の性格を大きく決定する。「警察の犬」はふつう「警察のスパイ」という意味で使われるが、状況によっては「警察犬」をさす場合もある。たとえば、「警察犬はどの辺りを捜してましたか。」と取材記者に聞かれた住民が、「警察の犬なら、向こうの方へ行きましたよ。」と答えた場合などである。しかし、「お前は警察の犬か。」と問い質される場面では、「警察のスパイ」という意味である。

このような場の状況、それを意識して、言葉は発せられる。そしてその文脈のなかで言葉の意味は決まる。最近の若者言葉KYは、「空気が読めない」の略語だそうだが、その「場の空気」が文脈の基本をかたちづくる。KYとならないよう、文脈をつかむことが文章を読む場合も必要となる。文章が書かれた場の状況がわかれば、そこに書いてある内容は理解できる。

会話文では、いま君がいるその場の空気が文脈となる。しかし、書かれた文章の文脈は、いま君がいるところではなく、その文章を書いた著者が意識したところにある。会話文と書かれた文章では、そこがちがう。だから、文章が書かれた場の状況をつかむには、会話文での空気を読む能力とは異なる力が必要となる。

ふつうテーマがわかれば、その文脈がわかる。しかし、そのテーマについて初めてしらべる人間にとっては、前もってその文脈がわからないのだから、大変である。私の遣り方は著者の枠組みをとらえることだ。枠組みがわかれば文脈もわかる。枠組みをとらえるとき、私はまず著者がどのように二分しているかをみる。男と女、大人と子どもなどという対である。これはきわめて簡単な事例だが、これだけでも、同じ人間を区分するにも2種類あることがわかる。しかも、この2つを組み合わせて、「女子ども」と「大人=男」と見なす見方もある。「大人=男」とみる見方は、ついこの前までであった考え方である。わが国だけではない。英語では「man」が男であるだけでなく、人間でもあった。今でもその意味はある。人間を代表するものとして、大人の男をイメージする考え方は、男女差別主義として批判されるようになった。そのなかで、人間を指すものとして「human being」という用法も現れてきた。

さきに、中世から近代への展開の基本的流れを押さえることが必要だとのべたが、二項対立図式でいえば、それは、前近代と近代、近代と現代という2組の枠組みとなる。(後者は難しいので) 前者についてだけ簡単にふれば、何が近代を特徴づけるかが論点になる。たとえば、市民革命は

政治的近代を特徴づけ、産業革命は経済的近代を特徴づける。このように二項対立で押さえた上で、さらに次のような問いが出てくる。では、文化的近代は何によって特徴づけられるか。また、市民革命の中身は議会の設立か主権の帰属か。等々、さらなる問いが出てくる。この問いを追っていくことがテーマを深めるということだ。だから、一応当座の理解ができれば、基本的展開を押さえたとなり、それでよい。

5. 繰り返し読め

言葉の意味を決めるのは文脈だから、本を読むときは、文脈全体に通目を通さないといけない。ある言葉の意味を決める文脈の長さがどの程度になるかは、一概にいけない。一文で意味が決まる場合もあれば、読んで文章全体で決まる場合もある。テーマそのものの意味は、論文全体によって決まるというべきかもしれない。

文は単語を組み合わせた集まりであり、論文全体は文の集まりである。論文全体と文の中間に、段落がある。また、段落と論文全体の中間に、項目（見出し）がある場合もある。今読んでこの章は5つの項目から出来ている。この程度に長い文章は項目に分けるのがふつうである。項目は1つの意味的まとまりであり、その名称（＝見出し）がその意味を示している。それは文章理解の手掛りのひとつである。

段落も1つの意味的まとまりである。だから、丁寧に読むときは、段落ごとにその意味を確認した方がよい。1つの意味的まとまりを段落とせよとは、文章作法上の原則的注意である。ただし、意味的まとまりで1段落をつくると、1段落が長くなる傾向がある。だから、ほんとに堅い学術的な論文の場合以外、この原則をまもっていない文章も多い。もしかしたら、君たちが読む文章の多くは、それかもしれない。しかし、原則は、段落がひとつの意味的まとまりである。段落にはふつう、その著者の書いているときの思考のまとまりが反映されている。それを念頭に置いて、段落の意味を確認するとよい。

1度読んでわからなかったら、その箇所をもう1度読んでみる。1度目には理解できなくても、2度目には理解できるようになる。それでもだめなら、もう1度再確認することである。これでも理解不能な場合、その箇所は飛ばして先へ読み進むのがよい。文章表現が曖昧なこともある。その場合、先まで読んでもう1度ふりかえれば、理解できるようになる。

わからない箇所がずっと続くような場合、それはたしかに、「君にとって難しい本」である。しかし、「難しい」はほとんどの場合、「慣れの問題」にすぎない。何度も何度も繰り返して読めば、その本に慣れ、理解できるようになるものである。難解な代名詞といわれるヘーゲル自身、『大論理学』の序文かどこかで、彼の弁証法が難解と感ぜられるのは、読者がその考え方に慣れてないからだと書いていたと思う。慣れるには、何度も読む必要がある。「読書百遍、意自（おのずか）ら通ず」というではないか。

百回読む必要はないと思うが、私の体験では修士論文を書くために、大塚久雄の『共同体の基礎理論』を5回読んだことがある。赤鉛筆と黒鉛筆を持って、重要箇所とわからない箇所に線を引こうとした。しかし、それではほとんどすべての文章が黒か赤になってしまった。赤鉛筆も消せるから、もう1度最初から読みなおして、計5回読んだ。読むことを繰り返すうち、たしかに理解は進んでいくものである。それで内容すべてが理解できたというわけではない。理解できない箇所は残った。だが、理解できた箇所とできない箇所の区別がつくまでになった。この区別がつくことが本を読む上での大きなポイントである。私はこれで、8割程度理解できたという「感覚」がもてた。今でも、この程度が本を読んで理解できたというときの私の「感覚」である。このように、わからない部分が残る。それがふつうの理解だと思う。

ヘーゲルのいうように、彼の弁証法についても、繰り返し読めば理解できるようになってくる。日本人の思考方式は、じつは弁証法に馴染みやすく、形式論理をつきつめていくことの方が私たちは苦手だという指摘もある。私たちは形式論理にもとづく科学的論文を苦手とし、弁証法の方は「花咲いて枯れ落ちる」という日常思考に近い、というわけである。じつさい、合理主義者を自認する英米系の哲学者には、ヘーゲルの非合理主義は理解不能なものとして主張する者が多い。ヘーゲルとか、ハイデッカーとか、難解な本といわれるものの場合、理解すべき内容は思考の道筋それ自体である。単にそこに書いてある「情報を手に入れる」ことではない。ふつうレポートを書く場合は後者だろうから、ヘーゲルの難解さの問題は発生しないだろう。もし君たちがヘーゲルに興味があれば、読めばよい。興味があれば、繰り返し読むうちに理解できるようになってくる。私はそう信じている。

現実の理解は、この中間レベルにあると言うのが正確だろう。あるテーマを理解することは、「単に情報を手に入れる」とこととヘーゲルの難解さの中間にある。だから、内容理解のために「繰り返し読む」必要性も、たまには生じるはずである。

(念のための補足として。ヘーゲルを理解するためにヘーゲルだけを読み進めればよいと理解されると困る。当然のことだが、ヘーゲルも彼自身の前にすでに存在していたある主張（考え方）に対して、自身の主張を述べた。だから、ヘーゲルを理解するためには、その辺りの哲学史的事柄を知らなければならない。ヘーゲルを知るにも参考文献は必要だということである。もっとも、このような言い分には反対論もある。哲学は時間を超えたものだから、このような歴史的な理解はおかしい。むしろ読者は積極的にヘーゲルから直接に啓示をもらうべきだとする考え方もある。これは、読者となる者の興味関心の在り所、態度の問題に帰着すると私は思うが、ヘーゲル自身の主張にも「先行研究」はあるということである。)